
LOVE SONG ~ 君に逢いたい ~

AYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE SONG ～君に逢いたい～

【Nコード】

N7425X

【作者名】

AYU

【あらすじ】

インディーズバンドでヴォーカルをしている大地には、大切にしている少女がいた。大学病院で出会ったみのは心臓に病を持つという。家族の愛に恵まれないみのは、「家族になろう。そのあと恋人になって」と言う彼女の願いを大地は受け止める。一緒に曲を作ったり、ギターを教えたり、静かに愛を育んでいく大地とみのは。だが、みのはに忍び寄る病魔と周りの圧力でふたりは引き裂かれてしまう。

音楽を通して出会ったふたりの、切ない純愛ストーリー。

本家小説サイトで拍手御礼として連載していた『大地のラブソング』を加筆修正しています。

【1】pure soul

「おつかれー！」

ライブの後の楽屋。バンドのメンバーは皆ビールで乾杯している。インディーズで活動しているこのバンドに、メジャーデビューの話が持ち上がった。

そのせいか、今日のライブは満員御礼。メンバーも客も妙にテンションが高かった。

体温と興奮状態はステージが終わってもまだ冷めず、小さな楽屋の中は熱気に包まれている。

皆が浮かれ騒いでビールを飲んでいるなか、大地は楽屋の片隅のパイプ椅子に座り、ひとりでコーラを飲んでいた。

「なんだよ大地。お前もビール飲め！今日はお祝いだぞ！」

「いや、俺は今日バイクだから……」

ドラムのアツシが「いーじゃん、いーじゃん！」と言ってビールをぐいぐいと勧める。

（やめろよ！このヨッパライ！）

アツシはライブ前からビールを飲んでいて、ライブ中もテンションMAXだった。

よくいえばムードメーカーなのだが、絡み癖があつて困る。

「やめとけアツシ。大地はまだ未成年だから、飲酒で捕まったらヤバイ」

そう言っすけて絡むアツシを止めたのは、バンドのリーダーまつきゆうの松本祐輔。

まだ大学生なのだが、妙に貫禄があるベースリストだ。

「はああ。こいつまだ18なんだよな。酒もやらない、タバコも吸わない。まさか女もまだなんて言わないだろうな？」

アツシが冗談半分に言った言葉に、大地は真っ赤になって横を向く。

「うわっ、マジかよ。ステージの上では女をメロメロにさせてる大地くんが、こんな純情ボーイだとは誰も思わないぜ？」

呆れ顔で大地の額をアツシが小突いた。

みねやしきだい 峰屋敷大地はバンドの中では最年少で、このあいだ高校を出たばかりの18歳だ。

在学中に松木の誘いでバンドに加入したのだが、その天才的な歌唱力とギターテクで、彼がメンバーになった直後バンドの人気は爆発した。

まだあどけなさの残るベビーフェイス。だが、そのパワフルな歌声は誰をも魅了する。

その一方、歌っているとき以外はあまりしゃべらず、MCの時間に一生懸命力ミカミで話す姿に、女性ファンは母性本能をくすぐられるらしかった。

「いいだろ。大地のそんな純情さがいって女たちが、毎回詰めかけんだから」

「だな。俺たちのファンはヤローどもばっかだけだな」

アツシは笑いながら、他のメンバーのところへ絡みに行った。

周りに誰もいなくなったのを見計らって、松木がこっそりと大地に耳打ちする。

「大地、お嬢が来てるぞ」

「え!？」

目を見開いて、大地はパイプ椅子から勢いよく立ちあがった。

「俺の車の中で待っててもらってるから……ホレ、鍵」

そう言って、セカンドバッグの中から取り出した車のキーを手渡す。

「サンキュー! 松っちゃん!」

誰にも見られないように、大地はこっそりと受け取ったキーをポケットにしまい込んだ。

「あとは俺がうまくやるから……くれぐれも、気をつけるよ?」
「了解」

差し出された松木のゲンコツに拳を当ててニコリと笑うと、大地は足早に騒々しい楽屋を抜け出した。

ライブが終わってからだいぶ時間もたっていたので、出待ちをしていたファンの姿ももう見えない。

大地はライブハウスから少し離れた駐車場に停めてある、場違いな高級車に向かって歩いた。

ガラスにスモークが貼ってあるから中は見えないが、きっとあの人が待っていてくれるはず。

大地はリモコンでピピッと車のロックを外した。

「大ちゃん！」

その途端、子犬のように元気よく車から飛び出してきた女の子。

「みのりちゃん！」

飛び跳ねるように抱きついてきたお人形のような女の子を、大地はふんわりと抱きしめる。

「大ちゃん、今日もかっこよかったよっ！」

興奮して目を輝かせ、みのりは大地のほっぺたにキスをした。

「みのりちゃんも、会場で目立ってたよ？なんだっけその服……ピシク……？」

「ピンクハウス？」

みのりが、ゴージャスなフリルのついたそのスカートを片手でつまみあげる。

今日のみのりは、大きなフリフリの襟で、袖がポンッと膨らんだお姫様みたいなワンピースを着ていた。

ところが大地のやっている音楽は洋楽かぶれのハードロック。大地自身も金髪に近い茶髪で、腕にはトゲのついたリストバンドをしている。

メンバーはもちろん、ライブハウスに来る客もそんな感じなので、白いぴらぴらの服を着たみのりは相当会場で浮いていた。

（すごく彼女に似合ってたかわいいんだけど……かなり目立ってたな）

おとぎの世界から抜け出てきたような女の子がライブハウスで元気に飛び跳ねていた姿を思い出し、大地は苦笑する。

「今日、俺バイクなんだけど……その恰好じゃ無理だよなあ」

すると、みのりがニコツと笑って大地に言った。

「着替えちゃんと持ってたよ？ちょっと待ってて！」

車にボタンと乗り込んだ彼女を待つこと5分。

ドアを開けて出てきたみのりは、ジーンズにパーカー姿で、お姫様からフツの女の子に変身していた。

「かわいいじゃん！」

「でしょー！いとこの果南ちゃんにもらったんだあ」

いつもお嬢様スタイルなので、こういうラフな格好がとても新鮮に映る。

「仕上げに、これを着て？ちょっと汗臭いかもしれないけど……」

そう言っただけは、着ていた皮ジャンを脱いでみのりに手渡した。みのりは一瞬首をかしげて考えるようなしぐさをしたあと、くんと匂いを嗅ぐ。

「ほんとに確かめなくていいからっ！」

「ごめん」

ニコッと笑って皮ジャンを着るみのり。どうやら合格だったらしい。

「うふふ。あつたかい」

ブカブカの皮ジャンを着て嬉しそうにする彼女に、用意していたヘルメットをかぶせる。

首のベルトを締めてあげ、そのまま抱き上げてバイクの後ろに座らせた。

「大ちゃん、私バイク初めて！」

「そうなんだ。病みつきになるよ？」

キーを回し、エンジンをスタートさせる。

アルバイトでようやく買ったアメリカンスタイルの250ccのバイク。

低いエンジン音と振動が心地よい。

ハンドルに手をかけた大地の体に、後ろからみのりがギュッと抱きついた。

「夜のツーリングに、レッツゴー」

みのりの言葉を合図に、夜の街に向かって大地はバイクを走らせた。

【2】出会い

「きゃーきゃー！大ちゃん、すごい風っ！」

「えー！？なに、聞こえないー！」

大地の背中にぴったりと体を押し付け、みのりがなにやら叫んでいる。

いつもはガンガン飛ばすのだが、今日は大事な人を乗せているから無理はしない。

車通りの少ない道を選び、大地は山の上までバイクを走らせた。

小高い山の頂上付近にある展望台。けっこう有名なデートスポットだ。

その駐車場にバイクを止め、みのりを抱き上げて下に降ろす。

「なんだか、体がまだぶるぶるしてる」

バイクの振動が体に残っているらしい。みのりが大地に見せた手のひらは、微かに震えていた。

「怖くなかった？」

「ぜーんぜんっ！だって、大ちゃんが一緒にいてくれるんだもん」

みのりは背の高い大地を見上げ、ニコツと笑いかけた。

大地もつられて、彼女に微笑みかける。

展望台の上は風が強かったが、ふたり寄り添って、きらびやかな夜景を眺めた。

大地とみのりが出会ったのは、大学病院の院内学級だった。

バンドのリーダーの松木は、そのいかつい容姿に似合わず大学でボランティアサークルに入っていた。

病院で働いている知り合いから、子供たちに音楽を教えてほしいと言われた松木は、一緒にやってくれと大地に頼んだのだ。

正直めんどろだなと思ったのだが、松木に世話になっていた大地は、一肌脱ぐことにした。

初めて院内学級に顔を出した時、そこにみのりがいた。

色が白くて、真っ黒いツヤツヤした髪の毛、天使のような女の子。

はつきりいって、一目ぼれだった。

「今日はこちらにいるお兄さんとお姉さんが、みんなに歌を教えてくださいますよ」

若くて元気のいい女の先生が、そう言って3人を子供たちに紹介した。

花沢果南というその彼女が、はなざわかなんどうやら松木の知り合いらしい。

（へー。松っちゃんも隅に置けないじゃん）

松木が彼女を愛おしげに見る視線が、果南がただの友達ではないことを物語っていた。

授業が始まり、松木がギターを、みのりがキーボードを弾き、大地が歌う。

誰もが知っているような童謡とかアニメソングばかりだったので、子供たちも大喜びだ。

最後には大合唱。あまり子供に接したことのなかった大地だが、その日は心から楽しく過ごせた。

「また一緒にやろう」と約束して別れたのに、彼女はそれから来なくなつて。

果南にみのりのことを聞くと、「あの子はボランティアじゃなくて、この病院に入院してる子なの。ときどきあやって手伝ってくれるのよ」と教えてくれた。

みのりの病室を教えてもらい、大地は入院病棟に行ってみることにした。

詳しいことはよく分からないが、彼女が入院している循環器科というのは、心臓の治療をするところらしい。

（悪い病気なのかな……）

あまり病気には縁のない生活をしていたので、病院独特の空気に違和感を感じて仕方がない。

肩身の狭い思いをしながらエレベーターで12階までたどり着き、大地はおそろおそろ循環器科のナースステーションで看護師に声をかけた。

「あの……花沢みのりさんの病室ってどこですか？」

年輩の看護師は、大地を頭のとっぺんからつま先までジロリと眺めたあと、「ご家族の方以外、面会はできません」と大地の言葉を一蹴した。

（ま、そのうちまた会えるさ）

がっかりしつつ、諦めて帰ろうとしたその時、

「あー！大地くんっ！」

と、廊下の向こうから大声で名前を呼び、走ってくる少女がいた。このあいだのワンピース姿とは違って病院のパジャマを着ていたが、それは大地が一目ぼれしたみのりその人だった。

「花沢さんっ！廊下を走ってはいけません！それと大声も出さないっ！！」

さっきの感じの悪い看護師に怒られて、みのりは「ごめんなさい」とぺろりと舌を出す。

「私に会いに来たんだよね？大地くん。食堂に行こっ」

大地の腕をガシツとつかみ、ぐいぐいと引っ張っていく彼女は、とても病気で入院してとは思えないほどパワフルだった。

病棟の食堂は談話室も兼ねていて、入院用のパジャマを着た患者と家族らしき人がたくさん座っている。

大地とみのりは、外の景色が見えるカウンターにふたり並んで座っ

た。

「びつくりしちゃったよ。いきなり病棟に大地くんがいるんだもん」

みのりは、黒目がちの大きな瞳で大地を見上げる。

（うつ。やっぱり超力ワイイ）

大地をまっすぐ見つめるその瞳に、大地の胸はドキドキしていた。

「果南さんにみのりちゃんがここに入院してるって聞いて……どっか悪いの？」

「うん。赤ちゃんの時心臓の手術をしてから、ときどき検査入院してるんだあ。最近ちよつと不整脈がひどくって」

「ふせいみやく？」

聞きなれない単語に、思わず聞き返す。

「んとね、私の心臓、いきなり早くなったり遅くなったり、時々止まったりするの。あんまり生活には影響ないんだけど、念のため異常を調べてて」

みのりは、なんでもないように自分の病状を言っただけだ。

確かに、重大な心臓の欠陥があったら、あんなふうに廊下を走ってきたりはしないだろう。

「そっかあ。大変だね。だから家族以外面会できないことになって

るんだ」

「そういうわけじゃないんだけどね。だって親もほとんど来ないよ？私是要らない子なんだもん」

「え？どういうこと？」

ケロッとした顔でびつくりするようなことを言う彼女。大地の問いかけに、みのりは窓の外を眺めながら事情を話してくれた。

「私ね、心臓の形が人と少し違うんだって。一応赤ちゃんのときに手術したけど、完全ではないの。そしたらね、おじいちゃんが『こんな欠陥品、どこにも嫁に出せない』って私のお母さんをものすごく責めたんだって。だからお母さんは、私がまだ小さい頃、花沢の家を出て行っちゃった。お父さんとお兄ちゃんの仕事で忙しくて全然来てくれないしさ。唯一面会に来てくれる人なんて、いとこの果南ちゃんくらいだよ」

「へー。果南先生、みのりちゃんのいとこだったんだ。そういえば、くりくりした目もなんかはよく似てる」

彼女の話に対して大地が言ったコメントがおかしかったのか、みのりがクスクスと笑った。

「……俺もさ、親がいないんだよね。ずっと北海道で暮らしてたんだけど、両親が事故でいっぺんに死んじゃってさ。このあいだ一緒にセッションした松木さんっていたでしょ？あの人ここで今世話になってる」

自分の身の上なんて人に話したことはなかったのだが、みのりに

はなぜか自然に言えた。

みのりが複雑な家庭事情をなんでもないことのように話すから、自分もすんなり話せたのだと思う。

「じゃあさ、じゃあさっ！」

目を輝かせながら、みのりが大地の腕を掴む。

「私たち、家族になろうよっ！で、そのうち恋人同士になっちゃわない？」

「ええっ！？みのりちゃん、家族と恋人じゃ別次元じゃんっ！しかも順番逆じゃん、フツー」

そう言うってから、みのりの言葉の意味を考える。

今……恋人同士って言った……？

「え、ええええ——！？」

大地は慌てて立ち上がった。

慌てすぎて派手に椅子を倒し、周りの注目を浴びてしまう。

「やだー！大地くんおもしろいつ！」

ケラケラと無邪気に笑うみのり。食堂にいた他の人たちも、皆クスと笑っている。

大地は真っ赤になりながら倒れた椅子をなおし、再びみのりの隣に腰かけた。

「私、本気だよ？大地くんカッコイイし、こんなきつかけでもない
と私一生彼氏とかできなさそうなんだもん」

みのりが『お願い』のポーズをする。

（やばい……超カワイイ……）

目の前にいるみのりの姿を改めて見る。黒目がちの、ぱっちりした二重の大きな瞳。肌は陶器のように白くてすべすべしている。髪は一度も染めたことなどないのだろ。背中まである、サラサラの艶やかな黒髪。

こんな女の子、自分だって滅多に出会えないし、彼女にできたら超自慢だ。

「うん……わかった。じゃ、まずは家族からスタート？」

大地はニヤケそうになる顔を必死で押さえながら、努めてクールにそう言った。

「そ。よろしくね！大ちゃんっ」

満面の笑みで、大地の腕にしがみつくみのり。

こうして、大地とみのりの家族ゴッコがスタートしたのだ。

【3】ファーストキス

夜景を眺めながら他愛もない話をしていると、時間があつという間に過ぎていく。

ライブが終わったあとに出てきたから、16歳のみのりを連れまわすには遅すぎる時間だ。

「みのりちゃん、そろそろ帰らないと」

「えー！？もう少し大ちゃんとかうしていたい」

「ダメ。果南さんにも迷惑かけちゃうだろ？」

「……はい」

みのりは大地にそう諭され、しぶしぶと展望台の手すりから離れた。た。

大地が差し伸べた手を握り、名残惜しそうにゆっくりと歩く。

体があまり丈夫でないみのりは、こうやって出歩くことも滅多にできない。大地にもそれは分かっていたが、なによりも心配なのは、みのりの体のことだった。

「ほら、もう手がこんなに冷えてるじゃん」

階段を下りたところで立ち止まり、みのりの両手を手のひらで包んだ。そして、はあっと温かい息を吹き込む。

その仕草を、みのりは黙って見つめていた。

みのりに『家族になろう』と言われてから約半年。

検査入院の結果、特に大きな問題はなく、彼女は退院して普通の生活に戻っている。

大地はバイトをしながらバンドの練習に励み、時間を見つけて彼女と会っていた。

みのりと会う場所は、公園だったりバイト先の近くのファーストフードだったり、とにかくのんびりした付き合いだった。

お互いに異性と付き合うのは初めてで、正直どんなことをしているか分からない。おまけに、彼氏彼女ではなく、家族としての付き合いだ。一体何をすればいいんだ？

だからたいていはみのりが行き先を決め、大地はそれに付き合い合っていた。

話すことも他愛のないことばかりだったが、それでもみのりは楽しそうにしていた。

彼女はライブハウスにもよく顔を出した。

心臓が悪いというのにあんな大音量の場所なんかに来て大丈夫だろうかと思っただけ、案外平気みたいだ。

「私、学校の体育の授業だって普通に出てるんだよ？そりゃあ、他の人より足は遅いけど」

「それって、みのりちゃんのお尻が重いからじゃない？」

「やだあ！大ちゃんのエッチー！」

ポカポカと殴るふりをするみのりの拳を、大地は笑いながら受け止める。

（そっぴや、学校に迎えに行ったときは大変だったな）

彼女の通う高校は、ミッション系の私立の女子高。

「校門の前で待っていてね」とみのりに言われていたので、大地はバイクを正門の脇に停め、みのりを待った。

ところが、いつまでたってもみのりは出てこない。

正門から次々と下校していく女子生徒は、大地の姿を見てキヤアツと真っ赤になったり、クスクス笑ったりする。

自分がさらしものになっているような気がして、大地はものすごく居心地が悪かった。

結局みのりが出てきたのは、大部分の生徒が下校してからだ。

「遅いよみのりちゃん！めっちゃめっちゃ恥ずかしかったんだぜ？」

そう言って少し不機嫌になる大地を、みのりが「まあまあ」となだめる。

「懂れてたんだよねー、こういうシチュエーション。めっちゃめっちゃカッコイイ人が校門で待ってくれてさ、他の生徒たちが『誰を待ってるんだろっ』って興味しんしんで見てるわけ。で、私が校門から出ていくと、『みのり、待っていたよ』ってその人が抱きしめてくれてさー」

「みのりちゃん、それってマンガの読みすぎ」

呆れてそう言う大地に向かって、みのりはペロツと舌を出した。

そんな感じで、みのりとはゆっくりと心を通わせていた。
ままごとのような付き合いだったが、彼女が望むのは『家族』としてのぬくもりだ。

正直、焦る気持ちもないわけではない。ただ、こっぴつ空気のように安心できる関係も、それはそれでいいと思う。

まるで兄が妹にするように、冷えた手を温める。

するとみのりは、大地の目をじっと見つめ、口を開いた。

「あのさー、大ちゃん。そろそろ私たち、恋人同士に昇格しない？」
「……なんで急に？」

内心ドキドキしつつも、冷静さを装ってそう答える。

「だってさー、ライブ会場で、大ちゃんモテモテなんだもん」

少し拗ねたように、目を伏せる。

今日のライブで、なにかあったのだろうか。

『お前のファンがみのりちゃんに悪さしないように、気をつける』

松木に何度も言われた言葉。

確かに、ファンの中には狂信的な奴らもいて、メンバーの彼女が嫌な目にあったことも一度や二度ではない。

大丈夫だろうと思いつつ、何かあったら『大地の妹だ』と答えるようにと、みのりには言い含めていた。

何度も何度も『アンタ、大地の何！？』と言われ、『妹です』と答えているうちに、みのりはファンの間でも『大地の妹』として定着したようだった。

「なんかさー、みんな私のこと『大地の妹だから』ってノーマークで、ちよつと悔しくってさー。今日も、『お兄ちゃん、デビューできたらいいね』って子供扱いなんだよー？」

そう言つて、ぷーっとむくれるみのり。
なんだ、そういうことだったのか。

「家族より、恋人の方がよくなっちゃったの？」

クスクスと笑いながらそう聞くと、みのりがコクンと頷いた。

「……じゃ、今日から恋人同士ってことで」

大地はみのりの髪を優しく撫でた。

澄んだ瞳で見上げる彼女が、ふと目を閉じる。

(……正直、俺はずっと恋人のつもりだったよ)

大地はゆっくりと身をかがめ、彼女のさくらんぼのような唇にそつと自分の唇を重ねる。

初めてのキスをするふたりを、満天の星空が包みこんでいた。

みのりの小さな体を抱きしめっていると、ふいに携帯電話が鳴った。

『おい。いつまで遊んでるんだ？早く帰ってこい』

松木からの電話だった。

みのりは果南と食事に出かけると言つて出てきたらしいので、そろ

そろ送らないとまずい。

「……帰ろうか」
「ん」

恋人になった最初の日。まだまだ兄と妹のような空気感是否めない。でも、少しずつ恋人らしくなっていけたらいいと思う。

バイクでもとの駐車場まで戻ると、そこには松木と一緒に果南が待っていた。

「みのりちゃん、楽しかった？」

「うん！」

「なんかいいことでもあったの？顔がニヤけてる」

「えへへー、ナイスヨ」

いとこ同士の果南とみのりは、それこそ姉妹のように見える。いや、みのりを支える果南は、彼女の姉そのものだった。

「果南さん、遅くなってすみません」

「いいのよ。たまには羽を伸ばさなきゃ。私が一緒だと言っておけば大丈夫だから」

みのりの実家は、不動産業から始まって大企業まで成長した、日本でも屈指のグループ会社を経営しているらしい。

一度松木とともにみのりの家を見に行ったことがあった。ぐるりと敷地を取り囲んだ高い塀。入口には監視カメラも設置されていて、ものすごい威圧感のある家だった。

（お父さんとお兄さんは、仕事で忙しいって言ってたけど……）

あの大きな屋敷で、みのりはずっと寂しい思いをしてきたのだろう。だから大地に、家族の絆を求めたのだ。

（俺が、君を守ってあげるから）

大地は、そんな気持ちを抱きながら、遠ざかるテールランプを見送った。

【4】LOVE SONG

大地の家は、郊外に建っている古い煉瓦造りの一軒家だ。

両親が多額の遺産を残してくれたので、高校を卒業すると同時にこの中古の家を買った。

そこで、松木と一緒に暮らしている。

1階はリビング、2階が寝室。そして地下には、防音設備の整ったスタジオがある。

バンドの練習がある時はみんなでそこに集まり、とことん音楽にのめりこんだ。

大地の両親は、まだ中学1年だったところに交通事故でふたりいっぺんに死んだ。

家は農場をやっていたのだが、北海道に広大な土地を持っており、それが空港建設の際に高値で買い取られた。だから、かなりの資産があった。

両親の葬儀の時、自称親戚が、未成年で一人息子だった大地のそばにわんさかと群がってきた。

まだ13歳だった彼の目の前で繰り広げられる、遺産と親権をめぐる争い。誰もが大地を欲しがった。いや、彼についてくる多額の財産を。

誰を信じていいか分からず、大地はパニックになっていた。だが、遺言で後見人があらかじめ決められていたことが分かり、東京に住んでいるその人のところに預けられることになった。それが、松木の家だ。

両親とどういう繋がりがあったのかは知らないが、松木夫妻は大地にとってもよくしてくれた。

管財人としての役目も担っていたので、成人するまでは松木夫妻が財産を管理している。そして大地が20歳になった時、初めて彼自身が自由に使えるようになるのだ。

良心的なその後見人は、必要なものは何不自由なく与えてくれた。だが、必要以上のものは与えず、大地にお金の大切さも教えてくれた。

その家の二男だった祐輔とは、3つ違いですぐに仲良くなった。大地にギターや音楽の楽しさを教えてくれたのも、彼である。

高校を出る時、もつと上の大学や専門学校を勧められたが、早く自立したかった大地は進学の道を選ばなかった。

大地は松木夫妻に「いずれ北海道に戻って農場をやりたい。それまでは東京でアルバイトをして生活します」と、20歳になって遺産が彼のものになるまで、とりあえずここでやっていくと告げた。

自分の故郷は、やはり北海道だ。都会もそれなりに刺激的だけど、やはり終の棲家はあの広い空の下だと思っている。

大地は音楽と同じくらい、土の感触が好きだった。

今住んでいる家は、松木が通う大学とも近い。

松木夫妻は心配したが、早く自立したいという大地の願いを聞き入れ、この家を与えてくれた。

1階のリビングにあるCDラックから、何枚かCDを取り出す。
レッドツェッペリン、エアロスミス、ガンズアンドローゼズ……

（このあたりだったら、みのりちゃんが知っている曲もあるかな？）

みのりは、再び検査入院することになった。

それで「入院の間ヒマだから、何か音楽ダビングしてきて」と彼女が大地にリクエストしたのだ。

はつきりいつて、お嬢様育ちのみのりの好みに合うか分からない。
けれど、ライブでもあんなに弾けていたし、『大ちゃんの好きな曲
ならなんでも好き！』と言っていたので、「こんなもんだろ」と
いくつかメジャーな曲をセレクトした。

（そういえば、心臓の音が不規則だって言ってたよな……）

大地は自分の手首に指をあて、脈を調べてみる。

トントントン……

ミディウムテンポの、ゆったりとした優しいリズム。

そばにあったアコースティックギターを手に持ち、そのリズムに
合わせて弦を弾いてみた。^{はじ}

（彼女のイメージは、やっぱりCコードだな）

みのりの笑顔を思い浮かべた。明るくて、花のようで……。

いつも学校やバイトが終わったあとに会っていたから、なぜか夕暮
れ時の淡い光の中に立っているみのりの姿が思い浮かんだ。

（こんな感じかなー）

柔らかな夕焼け空のイメージで、そのリズムに曲をつけてみた。

「いいね、その曲」
「わっ！」

突然うしろから声をかけられ、驚いて振り返ると、そこには松木とみのりが立っていた。

「み、みのりちゃん!？」
「えへへ」松木さんをお願いして、連れてきてもらっちゃった!」

大地は、みのりに会えた嬉しさと曲を聞かれた恥ずかしさで、かなり心臓がバクバクしていた。

「あ、い、いらっしやい」

動揺しながら、とりあえず挨拶する。彼女はおかしそうにクスクスと笑った。

「果南のところに用があって行ったら、みのりちゃんにかまってさ。お前んとこ連れてけってうるさくて」

「なによー! 松木さんが誘ってくれたんでしょー!」

どうやら松木が気を利かせて、みのりに声をかけてくれたらしい。

「あ、俺今からバイトだから。みのりちゃん、帰りは大地に送ってもらって」

「はい。松木さん、ありがとう」

松木は出がけに大地を呼ぶと、ポケットから何かを取り出して握らせた。

「必要ないと思うけど……ま、一応エチケットとして」

ニヤリと笑い、松木は手を振りながら玄関を出ていった。手のひらをそつと開き、手渡されたものを見てみると……

「松っちゃん……!!」

大地は慌ててジーンズのポケットにそれをしまい込んだ。心臓がバクバクしている。

（カンベンしてくれよ）

「松木さん、なんだって？」

「どわっ」

いきなり背後から声をかけられ、驚いて飛び退いてしまう。

「ぶぷ。大ちゃん、びっくりしてばかり」

みのりがケラケラと笑った。

（みんなして、俺で遊びやがって）

ポケットに入っているやっかいなブツ。みのりに気付かれなかったかとヒヤヒヤしたが、どうやら彼女は見ていなかったらしい。付き合ってるんだから、そういう欲望がないわけではない。けれど、心臓が悪い彼女に触れるのは、やはり躊躇ためらいしてしまう。

「お茶いれるから、ソファに座ってて？」

みのりにそう声をかけると、はいと言って彼女はリビングに戻っていった。

キッチンでふたつのカップに紅茶を入れ、トレーに乗せてリビングに向かう。

すると、大地がさっきまで弾いていたギターをみのりが腕に抱えていた。

「ギターってよく分からないや。ピアノだとドレミファソラシドが順番に並んでるけど、ギターってそうじゃないんだね」

「ちょっとだけ練習してみる？」

大地はトレーをテーブルに置き、みのりのすぐ横に座った。

「ちょっと貸して」

彼女持っていたギターを手に取り、ドレミファソラシドのコードを弾いてみる。

「すごい！私もやってみる！」

みのりは、胡坐あぐらをかいていた大地の膝の上にちょこんと座った。

「み、みのりちゃんっ!」

腕の中にすっぽり入ってしまうほど、小さな体。髪の毛からは、ふんわりといい匂いがする。

大地はポケットの中に身をひそめている、松木から渡された避妊具のことが急に気になりだした。

(我慢してくれよ……俺の下半身)

そんな大地の葛藤を知ってか知らずか、みのりは振り返って彼の顔を見上げ、ギターギターの練習を催促した。

「えっと……これが『ド』」

みのりの手に自分の手を重ねてネック()を抑え、右手で弦をはじく。

「わっ!すごい!」

ふたりで次々と音階を奏でてみる。

音が出るたびにいちいち喜ぶみのりは、子供みたいにかわいかった。

「ねえ、さっきの曲、なんていうの?」

「さっきの曲?」

「私が来た時、大ちゃんが弾いてた曲」

「あゝ、名前はないんだ。適当に作ってみただけ」

さつき弾いていたメロディを、もう一度奏でてみる。
みのりは目を閉じて、その曲に聞き入っていた。

「これ録音して？私、入院してる間にこの曲に歌詞をつけてみるから」

彼女がそう言ったので、テープレコーダーの録音スイッチを押して、もう一度その曲を弾いた。
彼女をイメージして作った曲。それにみのり自身が詞を書いてくれるという。

ひととおり弾き終わり、録音スイッチを解除した。
するとみのりが、大地の方を見てこう言った。

「ねえ、この曲のタイトル考えたよ。『大地のラブソング』なんてどう？」

「ええ——！？」

ダイレクトなそのネーミングに、ひっくり返りそうになる。

「せ、せめて『LOVE SONG』にしようよ……」
「んじゃ、『LOVE SONG』ね」

みのりはニコツと笑い、その曲の入ったテープをカバンの中にした。
まった。

ネック……ギターの柄の部分

【5】宣告

バンドのメジャーデビューが決まった。もちろん、松木の両親は大反対だ。

「大地君を巻き添えにして！」

松木自身がどうこうというよりも、まだ未成年の大地がメンバーに入ることのほうが心配だったらしい。
松木とともに、大地は必死で説得した。
結果、大学はしっかり通うこと、法に触れることは絶対にしないことなどの条件で、なんとかOKをもらった。

バーミリオン
”Vermillion”。意味は朱色。
それがバンド名だ。

なんかよく分からないが、楽曲とルックスを売りにするらしく、金色に近かった髪の毛を、バンド名にちなんで全員赤っぽく染めさせられた。

メンバーのなかには、楽曲だけじゃなくバンドのスタイルそのものに口を出してくる事務所側に腹を立てているヤツもいた。

条件を飲めないメンバーは脱退し、大地と松木、ドラムのアツシだけが残った。

大地がギターとヴォーカル、松木がベースを担当する。
キーボードにひとり追加して、4人のメンバーでデビューを飾ることになった。

「へええ、すごいね！」

レコード会社がくれた、デビュー曲のデモテープ。アップテンポで、ギターソロの部分がめっちゃめっちゃカッコイイ曲だ。そのデモテープをウォークマンで聞きながら、みのりが目を輝かせた。

みのりはあまり体調が良くないらしく、検査入院の日からずっと退院できずにいる。

ほとんど毎日見舞いに行っているので、大地は病室まで顔パスだ。大地が来るとみのりが元気になるので、看護師も今では歓迎してくれている。

「シングルとミニアルバムを同時にリリースするんだ。曲作りが大変だよ」

ベッドサイドでそう言うと、みのりが首をかしげた。

「ライブでやってた曲はダメなの？」

「あれはもう、インディーズのアルバムに入ってるし。ああ、そういえば……」

大地は、事務所から渡された書類を取り出す。

「みのりちゃんが詞を書いてくれた曲あったでしょ？あれ、シングルのB面にすることになった」

「ええ——！？ほんとにつ！？」

みのりが大声を出したので、通りかかった看護師さんがシーッと指を立てた。

「参ったよ……みのりちゃんが書いてくれた詞、全部英語だったろ？あれ覚えんの大変なのに、松っちゃんもレコード会社も気に入っちゃってさー」

「だって、大ちゃんの英語の発音きれいなんだもん」

あのととき作った『LOVE SONG』という曲。
みのりが書いてくれた歌詞を見て大地はぶっ飛んだ。

（冒頭からラストまで、全部英語じゃん——！！）

一応高校は出ていたが、あまり勉強は好きではなかった。
ライブで英語の歌を歌うこともあるが、CDを聞いてヒアリングで覚えただけだし、意味なんて考えたこともない。

松木に歌詞の内容を見てもらったら、
「……英語の歌詞でよかったよ。すっごい熱烈なラブレターじゃん。日本語でなんて、恥ずかしくてとても歌えん」と言われた。

歌詞の翻訳も頼んでみたが、「自分で調べろ」とあっさり却下された。

「それでさ、著作権とかなんとかで、みのりちゃんにもサインしてもらいたいのがあるんだって。……で、未成年だから、一応保護者の同意も欲しいって言うんだけど……」

これだけ頻繁に病院に来ているのに、みのりの家族には一度も会ったことがない。

前に聞いて以来、みのりが家族のことをふたたび話す事はなかった。

「うーん、お父さんは忙しいし……お兄ちゃんでもいいかなあ。おじいちゃんは絶対反対すると思うから、ばれないようにしなきゃ」

そう言うと、みのりはピピピッと手早く携帯でメールを打った。

「ごめんな。変なこと頼んで」

「いいのいいのっ！お父さんやお兄ちゃんは忙しくてあんまり会えないけど、私の頼みは聞いてくれるから」

携帯をパタンと折りたたみ、みのりが大地に微笑む。

「大ちゃん……夢が叶って、よかったね」

次の日、いつものように病室に見舞いに行くと、見慣れない人物がそこにいた。

「うちのお父さんだよ」

初めて会ったみのりの父親は、娘に会っても病状を尋ねる事もなく、トラブルの視察に来ている政治家のように淡々としていた。

回診に来た医師と二言三言話したあと、「もう用は済んだ」と病室を出ていく父親。

大地は、契約書のお礼を言おうと彼のあとを追いかけた。

「峰屋敷大地くん……だったね。ちょっと付き合ってくれないか」

威厳のある、いかにも実業家といった風貌の花沢にそう言われ、大地は黙ってついていく。

彼が向かった先は病院の地下駐車場。そこに、黒塗りの高級車が停まっていた。

花沢と一緒に、後部座席に乗り込む。運転席には、彼の秘書なのだろうが、立派な仕立てのスーツを着た若い男性が座っていた。

「みのりの兄です」

その男性は大地に向かってそう告げた。

みのりの兄？病院まで来ているのに、妹の顔を見に来ようともしないこの人物が？

彼女は、家族は忙しいから自分に会いに来ないと言っていた。だが、彼女の言うことと今の状況は、かなり食い違っている。

みのりが家族の存在を欲したわけ。大地には、それが分かったような気がした。

隣に座ったみのりの父親が、ビジネスバッグの中から何かを取り出す。

「なんですか、これ」

目の前に差し出された、白い封筒。

「投資だ」

「投資？」

「君の音楽を聞いたよ。いい仕事をしている」

「いい仕事……ですか」

音楽をビジネスとしか考えられない連中は確かにいる。所属している事務所も、その類^{たぐい}だ。

この人も……みのりの父親も、やはりそうなのだろうか。

「ここに500万人入っている。これで、みのりの前から姿を消してほしい」

大地の音楽。娘であるみのり。そして、500万もの大金。

「……意味がわかんないんですけど」

音楽しかないこんな自分じゃ、娘にふさわしくないから身を引けというのだろうか。

すると、大地を見る花沢の表情が少し緩んだ。

「私は、君の所属するレコード会社のスポンサーをしている。君の歌を聞かされた時は、鳥肌が立ったよ。すごい才能を持っている」

ますます意味が分からない。だからどうだというのだ。

「君は、絶対に売れるだろう。いや、絶対に売ってみせる。……だが、そうなって辛い思いするのは、みのりだ」

「……みのりちゃん？」

「ああ。みのりの病気のことは聞いているかね？」

「はい……不整脈っていうのは……」

小さい頃に心臓の手術をして、今は不整脈で検査入院をしている。
みのりは、大地にそう言った。

みのりはただの検査だと言っていた。見た目も元気そうだから、
大地は彼女の言葉を信じていた。
けれど、それは違うというのだろうか。

「みのりは、先天的な心臓の欠陥がある」

「それは、本人に以前聞いたことがあります。赤ちゃんの頃に手術
したって」

「確かに一度、手術をした。ただ、みのりの病気は進行性の難病な
んだ」

「え？」

「みのりは……そう長くは生きられない」

そのあと、どうやって家に帰ったか全く覚えていない。
気がつくと、大地は自分の部屋で大音量でCDを鳴らし、狂ったよ
うに声を張り上げていた。

みのりの父親が言ったことが、いつまでも耳に残っている。

自分たちがメジャーデビューすることで、周りは確実に騒がしくなるだろう。

みのりの心臓が抱えている爆弾は、いつ爆発するか分からない。長生きして、普通に生活している人もいるらしい。だが反対に、ある日突然亡くなる人もいるそうだ。

大地のそばにいて心身に負担がかかれば、それだけ発症のリスクが高くなる。

だからあの500万で娘の前から姿を消してくれ、それがみのりの父親の話だった。

「くっそ——！！」

大地は、手元にあったギターを、壁に向かって力いっぱい投げつけた。

【6】secret live(1)

デビューシングルとミニアルバムが同時に発売され、にわかによりが騒がしくなる。

テレビやラジオへの出演。雑誌のインタビュー。

もちろんライブも続けているが、客の動員数が大幅に増え、今までに狭いライブハウスは使えなくなった。

メディアへの露出が増えたせいで顔も知られるようになったが、大地は相変わらずみのりの病室を頻繁に訪れていた。

もちろん、病院のスタッフや入院患者も、大地がメジャーデビューしたことは知っている。

いろんなことが変わるかもしれない。そう思っていた大地だったが、みんなの変わらぬ笑顔にほっと胸をなでおろしていた。

「テレビで見るよりオトコマエね」 「応援してるよー」と気さくに声をかけられ、嬉しいやら恥ずかしいやら。

でも、みんなが温かく見守ってくれるのは、なによりみのりの明るいキャラクターのおかげだと思う。

「あー！！来た来た、大ちゃん！」

ある日食堂の方へ行くと、テレビの大画面の前にスタッフや病棟の人たちが集まっていた。

「ちょ、ちょ、ちょっとみのりちゃんっ！ 何見てんだよー！」

みんなが集まって見ていたのは、このあいだ出演したSステという音楽番組の映像だ。

司会の人とのトークのあとに、ステージで歌を歌う。

スタジオでの収録だったのだが、会場にはちゃんと客もいて、ちょっとしたライブ感覚でけっこう楽しめた。

「ぶぶぶ。大ちゃん、かつこつけてておもしろい」

何がおもしろいのかよく分からないが、みのりがやたらウケている。

「なんか変だった？」

「ううん、せつかく司会の人話が振ってるのに、全然しゃべらないだもんっ！」

……そういえば、そうだったな。

バンドのリーダーの松木とヴォーカルの大地がやたらと話しかけられたが、大地は緊張しまくってなにも話すことができなかった。それで代わりに、横にいたアツシが質問に答えたのだ。

「いや、かつこつけてたわけじゃないんだけどさ」

「分かってるよ？ライブでも大ちゃん、あんまりMCやらないもんね。で、ドラムで後ろにいたはずのアツシさんがいつの間にか前に出てきてしゃべってて……」

そこまで言うと、またみのりがケラケラと笑いだした。

「みのりちゃん、笑いすぎだよ……」

呆れてそう言うと、一緒にテレビを見ていた中年の女性が大地に話しかけてきた。

「大地くんがテレビに出るようになってもあんまり変わんなくて安心したわ。みのりちゃんも、『もう大ちゃん、来てくれなくなっちゃうかも』って心配してたからさ」

目の前で楽しそうに笑っているみのりが、そんなことを言っていたなんて。

そういえば、彼女は病気のことや家族のことで辛い思いをしているはずなのに、あまり泣きごとは言わない。

笑顔の裏に、どんな想いを抱えているのだろう。

帰り際、エレベーターホールまでみのりが大地を見送る。

いつもはそこで「またね」と別れるのだが、エレベーターが到着する直前、大地はみのりをエレベーター脇にある非常階段へと連れ出した。

彼女を抱きしめ、そっとキスをする。

また、少し痩せたみたいだ。

みのりが大地の背中に、そっと手のひらをのせる。しばらくそのまま、大地とみのりは静かにお互いを抱きしめあった。

正直、みのりの父親が何か言ってくるかもしれない、という不安もあった。

病院のスタッフに面会を拒否されるかもしれない、と覚悟もした。

けれどそんなことは一切なく、花沢からの接触もあれ以来なにもない。

デビューにあたってスポンサーへの挨拶もしたが、そのときも代理のスタッフと会っただけだった。

あの人は、こうしてまだ自分がみのりと会っていることを、知っているのだろうか。

たぶん……知っているとは思う。

あれだけの権力を持っている人物だ。調査することなんて、簡単なことだろう。

なのに、何も言ってこない。

あのとききつぱりと、花沢は大地にみのりの運命を告げた。なのに娘と会うのをやめない愚か者だと思っっているのかもしれない。みのりを励ましたい、という気持ちはもちろんある。だが、それ以上に自分がみのりに会いたいのだ。

言ってしまえば、自分だってみのりの存在に生かされている。

「大ちゃん……もっと一緒にいたい。大ちゃんの歌が聞きたい」

みのりが大地の胸に顔をうずめたまま、小さな声で言った。

大地は少し迷ったあと、ジーンズのポケットに入れていた一枚の紙切れをみのりに差し出した。

「いつものライブハウスで、シークレットライブをやるんだ。メジャーデビューしちゃったけど、今まで応援してくれたみんなへの気持ちを忘れないって意味で」

みのりの体のことがあったから、このチケットを渡すかどうかすぐ迷った。

でも、こういう小さなライブハウスでやることも、もうできなくなるかもしれない。

みのりは手を伸ばしてそのチケットを受け取った。

「ありがと。大ちゃん有名になっちゃったし、もう間近で大ちゃんの歌を聞くこともできないかと思ってた」

そう言って、大事そうにそのライブチケットを抱きしめる。

「じゃ、体調バツチりにしておいで。風邪なんかひいたらダメだからな」

「うん！大ちゃんの歌を聞くためなら、おとなしくベッドで安静にできる！」

「あはは……みのりちゃんってば」

次のエレベーターに乗り込むとき、彼女はすっかり笑顔になっていた。

よしっ――！

シークレットライブ、彼女のためにがんばるぞっ！

そしてライブ当日。

「な、なんか、すごくね？」

一部のインディーズ時代からのファンにしか知らされてなかったはずの今日のライブ。

会場の前には恐ろしいほどの客が詰めかけていた。

「みのりちゃん、大丈夫かな……」

そう呟くと、そばで聞いていた松木が俺の背中を叩いた。

「今からライブだつていうのに、お前はみのりちゃんの心配かよ。大丈夫。果南がついているから」

「だよ。でも、なんだか心配だつたからさ」

ライブのチケットを渡したものの、大地はやはり来るのをやめさせようと何度も考えた。

みのりの病状がどれくらい悪いのかは分からない。けれど、入院期間はすでに2カ月を超えていたし、検査の回数も増えていると聞く。

（もしかして、あんまり良くないんじゃないのかな……）

『いつ爆発するか分からない爆弾を抱えているようなものだ』

そう言った、みのりの父親の言葉を思い出す。

何とか外出許可はとりつけたと言っていたけど、みのりのことだから、こういったライブに参加するのが理由だとは言っていないだろう。

——何も、起こらないといいけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7425x/>

LOVE SONG ~ 君に逢いたい ~

2011年10月23日08時26分発行